

## 比較語彙論の構想 ——異文化比較研究のために——

田 島 毓 堂

### 1. 比較語彙論とは何か

私は先に異文化比較理解の一方法として、語彙分類を通してそれが可能ではないかということを述べた。それをさらに比較語彙論という形で考えようとするものである。ここでいう「比較」は、いはゆる「比較言語学」で用いるところよりは広い意味で用いる。「比較」なる用語を「比較言語学」の占有から解放したいと思うのである。世に他系統の言語間におけるそういう「比較」研究を「対照研究」と称し、「比較研究」というのを憚っているが、この「比較」という用語をその狭い用法から解放してもよいのではないかと思う。それによって、特に混乱が起こることも思えない。しいて、区別すべき時には「比較言語学」的用法を狭い意味での特別の用法とすればよからう。本稿での比較語彙論の「比較」は、言語の系統を問わずに用い、二つ以上のものを比べてみることを「比較」といおうと思う<sup>1)</sup>。そして、本稿が述べる方法は他言語間に適用できるはずであることを考えているのである。

また、すでに拙論「訓読法華経と仮名書き法華経と」<sup>2)</sup>の一部に語彙史の問題として述べたことであるが、この比較語彙論は、共時的に他言語間に適用されると同時に、通時的には同じ言語に適用して語彙史の記述をすることになる。いずれの場合も、比較対象とな

る語彙の「選定」とその比較の「方法」が重要な鍵になる。そのことを解決した上でのことである。ともあれ、その対象は、他言語にとるか、同一言語の中での歴史的側面にとるか。前者であれば、他言語の語彙のいわゆる対照語彙研究となるし、後者ならば、まさに語彙史研究をなすことになると考えられるということである。

### 2. 比較対象の選定と比較方法

#### 2.1 比較対象

語彙は茫漠たる世界であり、なかなか一筋縄では捕捉しがたい。そして、語彙はある意味で数量を基本とした存在である。

それを比較対照して研究してみようとするならば、自ずからその比較の対象を限定してかからねばならぬのは当然であるが、前記のごとく語彙の世界は、音韻や文法の世界とは違い、その体系の有無すらはっきりしない、まさに茫漠たるものである。一言語の語彙の全体像をつかむことなど不可能といって過言ではない。それでは、比較語彙論における比較の対象をどうするのか。それにはいくつかの仕方が考えられ、その比較対象の選定方法により、その明らかにしようとする内容が当然ながら異ってくる。以下、比較対象の選定方法について、私の考えを若干述べてみようと思う。

2.1.1 基幹語彙<sup>3)</sup>

基幹語彙とはその言語を使って言語行動をする際にはどうしても必要になってくる語彙である。骨格語彙、骨組み語彙なども称される。基幹語彙を選定するには、語彙調査が必要である。そして、その基幹語彙に現代語の基幹であることを反映させなければ、現代語の大規模調査が必要であり、過去のある時期の基幹語彙を選定しようとするれば、その時期の言語資料を出来る限り集めた上で、やはり相当大規模な語彙調査が不可欠になる。

例えば、日本語でいえば古代、しかも、平安時代の基幹語彙を選定しようとするれば、平安朝の多くの文学作品はいうにおよばず、種々の記録類、訓点資料類等を知りうるかぎり網羅した上での語彙調査を要する。中世の基幹語彙となれば、軍記物語、和歌、おとぎ草子、紀行文学、連歌、諸記録等、平安時代よりずっと言語資料の広がりが大きくなり、近世ともなれば、庶民文学を加えて飛躍的に言語資料は増加する。現代に至っては、文字資料に限っても網羅することは不可能であろう（もちろん、過去のいずれの時期をとってもその時期の言語資料を網羅することなどは同様に不可能である。ただ、われわれの知っている資料が少ないだけであり、また同時に、知りうるものも少ないのである）。しかし、我々が必要とする語彙が得られればよいのである。そして、基幹語彙の選定の場合、恐らく、どの時期のものをとっても、全数調査は不可能で、抽出調査の方法が取られるであろう（古代のある時期を限った場合知られるかぎりの全ての言語資料を調査することも可能な場合はあろう。しかし、その場合にしても、残っている資料自体がすでに全体から抽出されてあると考えられるのである）。

そのように調査した結果、調査した範囲での使用率が目安になる。ただ単に使用率のみでなく、その使用される範囲も勘案して基幹語彙は選定されるべきであろう。なお、時代毎に基幹語彙を選定する場合は、やがてそれが、語彙史の資料となるものであるから、その中の一部の語のみを対象とすべきではなく、一旦はすべての語を調査対象に含めるべきであろう。すなわち、日本語の場合ならば、文法的存在として、語彙調査の対象から外されがちな助詞や助動詞といったものも、語彙史的観点からは重要な存在となるのである。また、人名・地名等の固有名詞は、比較語彙論的にも有益な資料となると考えられるので、これまた調査の対象に含めておくべきである。人を何と呼ぶか、地名をどうつけるかは、比較語彙論での重要なテーマとなるであろう。

かくして選定された基幹語彙は、その対象となった時期のその言語集団の必要とした言語の諸相を反映する。従って、それを相互に比較することにより、それぞれの言語集団のものの考え方、ものの見方、それぞれの言語集団の環境やそれが持っている文化・文物といったものの相違や、相似が見てとられるであろう。つまり、その比較により、語彙のレベルで、それぞれの集団の文化等が知られるであろう。これは、同一言語の時代的变化の相についてみるならば、その言語の語彙史を記述することになる。

その比較の方法については後述するが、こうして選定された語彙のあらゆる面からの比較が必要である。ただ、この基幹語彙の選定ということは、言うは易くして行うには多大の労力と資金がいる。個人がなしうるのではなく、国民的規模のものとなる。既に調

査の行われた言語間において、さしあたり実行すべきである。

以上は、一言語体系の基幹語彙選定ということ念頭において述べたのであるが、これは上述のごとき困難も伴う。しかし、この基幹語彙選定は、その対象範囲を限定して行うことも可能であり、さし当ってはこれが現実的である。すなわち、すぐ可能なことからいえば、個々の言語作品・言語資料（これを個別資料と称する）においても有効であり、そのようにして選ばれた基幹語彙間の比較は自ずからその個々の作品・資料の語彙（以下「個別語彙」と称する）の間での比較対照となり、個別語彙間での比較語彙論的研究が成り立つ。その積み上げが、比較語彙論にとっては重要であり、特定の文学作品のいくつかの言語における翻訳を資料とすることによっても、この比較語彙論は成り立つ。そういう意味で多数の言語に翻訳されているものは自然、比較語彙論的研究の対象となろうし、古典の現代語訳は語彙史的研究の対象となる。その意味で、前者の場合は、聖書は第一級の資料であるし、法華経などもその対象となる。また、法華経は、日本語の中で、古典語としても書かれ、しかも、多くの時代の資料がある。さらに、現代語の訳もあり、語彙史的な資料としても優れている。こういう比較語彙論的研究・語彙史的研究の対象となる資料は、すぐにもいくらでもある。それについての語彙調査が必要であることはいうまでもないが。

### 2.1.2 語根的語基

各言語において用いられている多くの語は複合語である（なお、この複合語には合成語も派生語も含めておく）。その複合語を構成し

ている要素を語基と規定しておく。語根と語基とは厳密に言えば異なり、最も基底的な根源的なものが語根とされる。その一つのあらわれ、すなわち、特定の複合語の要素となったものが語基である。語根と語基とは同じことも、違うこともあり、ここで、対象としようとするものは、最終的には語根にたどり着きたいが、一足とびにはなかなかそれはむづかしい。実際の現れである語基ならば、複合語を分解して行けば得られるものであるが、その中には、被覆形ゆえの古形も出てくるであろうし、そうでなくても、被覆形特有の、露出形とは別の語形も現れるであろう。これは、もちろん、語根を推定し、決定していく上での貴重な情報になる。しかし、いくつかの違った語形をそのまま比較語彙論の対象とすれば、不適当なこともあろう。それゆえ、同一語根に属すると思われるものには一つの代表形、最も語根に近かろうと思われるものを定めて、それを語根的語基と称しておこうと思う。

各言語における語基ないし語根の数は実際に行われている膨大な語彙から見れば、それとは違って恐らくは、見通しのきくであろう範囲におさまるかと思う<sup>4)</sup>。

この選定方法は、基幹語彙のごとき大規模な語彙調査は必要ない。現代語であれ、古典語であれ、その言語の標準的な辞書の見出しが調査対象になる。まず、その中の単純語を選び出す。それはやがて、語根的語基の有力な候補になる。次に、複合語（合成語・派生語も含む）をその要素に分解し、その中から異なり要素のみを取り出す。そして、先の単純語と合わせ、同じものは除外して異なり単位の表を作る。それが、その言語の語根的語基の候補となる。ただ、この際、各言語は多

くの借用語を含むのが常であるので、それを除外する（これを除外せずに、それらも含めた語基を対象語彙と定めるやり方もあろうが、その言語の最も根底にあるものを探ろうとする立場では、借用語は除外するのが筋である）。そのようにし、同一語根から出た語基をできるかぎり整理していけば、自ずからその言語の語根的語基の表になるであろう。この場合、やはり、言語によって事情は異なるが、文法的要素とみられるものも、単独で現れる語形も複合語から抽出される接辞等についても省かざしておくことが肝要である。特に同一言語内での語彙史的考察の際には大切な要素となる。

例えば、日本語で助詞助動詞等を省いたものは、語彙史的研究の際にはどうしても半面を欠くことになる。

この語根的語基の選定の場合、時代ごとのものということは考えにくい。一言語にとっては、借用語を含めるか否かといった選定基準の違いによる選定結果の違いはあるだろうが、原則的には一つの語彙表を作ることになる。この語根的語基についての言語間の比較によって、それぞれの言語が根底に持っているものを知ることになるであろう。借用語を含めれば、いかなる要素が必要とされて借用されたか、言い替えれば、もともとそういうものを必要としなかったか、知らなかった環境においてその言語が生まれ育まれてきたと言うことを意味することになるであろう。また、借用されたものの役割についても考えるべきであろう。

この立場は、個人的にじっくり考えて同一規準で作業を進めていくことのできるものである。ただ、日本語の場合にはその語源がよく解っていないということが、これを進めて

いく上でかなり大きな障害になることが予想されるが、逆に、これを語構成論的に考えて行くことにより、語源研究にも光を当てることになることがあるはずである。

### 2.1.3 基礎語彙

基礎語彙という用語が何を指すかが先ず問題である。一方に基礎語なる用語もあって一層混乱する原因がある。この点からはっきりしておこう。いわゆる生活基礎語彙というものがある。方言調査ではかならず用いられる<sup>5)</sup>。人間が生活をしていく上で必ず必要となる語彙である。古く言語年代学などで対象とされたのもこの種のものであった<sup>6)</sup>。

この基礎語彙を対象として扱おうという場合はすでに各種の基礎語彙表が提出されているので、それから選定すればよい。

一方、基礎語といわれるものについては、次項で述べるが、Ogdenの“Basic English”や土居光知氏の「基礎日本語」<sup>7)</sup>などのことである。これは第二言語習得の際の簡易言語である。このほかに、単に基本語彙と称しているものがあるが、上述の基礎語彙を指していたり、前述の基幹語彙を指していたりするので、それが何を指しているのかをはっきりさせることが肝要である。基本語彙という場合は「～のための基本語彙」という何らかの価値判断を含んでいることが多い。むしろ、「基本語彙」はこのように使おうと思う。本稿での立場はほぼ林四郎氏の規定に従う<sup>8)</sup>。

ところで、基礎語彙については、上述の通り、すでに選定済みの種々の語彙表が用意されているので、これを対象にすればよいが、この比較が如何なる意味を持つかは前二項ほど明かではない。特に、語彙史の対象には、言語年代学が力を入れるところではあるが、

かえってなりにくいように思う。

他言語間では、前項で述べた語根的語基の比較ということの一部を形成するようにみえる。もっとも、基礎語彙は全部が全部、借用語無しのみのごとの純粋な語群とはかぎらない。従って、如何なる借用語が基礎語彙に取り入れられているかが問題であるが、これは、単に言語学的問題にとどまらず、いろいろな意味で重要な問題になるであろう。

#### 2.1.4 基礎語＝簡易言語

前項でも触れたが、Ogden の “Basic English” や土井光知氏の「基礎日本語」及び最近発表された「簡約日本語」等がある。「簡約日本語」は国立国語研究所で野元菊雄氏を中心として開発され、日本語教育のための利用が提唱されているものである<sup>8)</sup>。これを対象として分析することは一体どういう意義があるか。基幹語彙や語根的語基を対象とした場合に比べて限定的であることは当然である。しかし、それだけの語彙を修得すれば一応その言語が使えるということは積極的に評価すべきであり、文学作品の語彙などとは別に考えなければなるまい。それだけで一応意志が通じるということは、考え方によっては、現代語において最も根底的なもの、基本的なものともいえるのである。飾りを捨てた全くの骨格を示すということである。従って、その比較もその面を考えればよいということである。これらは、現代語を対象としたものであるから、現代英語、現代日本語の骨格がどういふものかを知る手段になる（もちろん、基礎日本語と簡約日本語の間には60年の隔たりがあり、それを選定した人の考えの違いと共に現代に属する範囲での変化を観察することができるであろう。）なお、こういう種類の

語彙は多くの言語について、日本国内でも「基本～千語辞書」という名で出版されている。大体は語彙調査の結果として、基幹語彙的なものが選定されているようである。いろいろな性格のものがあるから注意が必要であるが、最も簡便に各言語の骨格を比較する対象として用いることができよう。ただし、あくまでもこれには限界の有ることを銘記しておかなければならない。

### 3. 比較の方法

以上、比較対象の語彙を4種類に分けて考えてみた。その中にも種々あることも述べた。

比較の方法も、選定された対象とその目的によって違うことは当然である。語彙は数量的存在であるから、その数量的側面を無視することはもちろんできないが、以上4種の語彙の中で、その使用率までも問題に出来るのは2.1.1の基幹語彙を個別語彙<sup>9)</sup>から選定した場合に限られる。つまり、各作品間の比較対象の場合であり、最もきめ細かに比較調査ができる対象である。他の場合、例えば、一言語体系の基幹語彙については、正確な使用率はもちろん確定できない。語根的語基を対象とする場合は使用率は無意味であるとははいえないが、やはり、それを考えるとすれば、範囲を限定し、使用率の意味合もよく考えねばならない。ある語根的語基がどれほどの活性があるか、語基どうしの使用度合という面を知ることは意味があろう。基礎語彙や簡約言語においては、使用率ということはあまり意味をもたないであろう。

品詞的な観点は、一言語内での語彙的考察には欠かせないし、他言語との比較においても、一定の意味はあろうが、そのことが何を

意味するかは軽々にはいえない。文法的な違いが一体何を意味するのかを考えることは大切であるが、短絡的な思考はことの本質を見誤る危険性がある<sup>10)</sup>。

語種の問題は、日本語の中では重要なことであり、日本語語彙史の問題としては放置できないことである。英語史の場合にも同様のことがあろう。しかし、この比較によって、語彙の実態は知れても、その実態が何を示すのかは、文法的差異よりはわかりやすく、語彙の問題として重要であるが、その意味合は、やはり慎重に考えねばならない。

語構成がどうなっているか、語の長さはどうかといった観点も同様に語彙の実態を明らかにする上では役立つことと思われる。

以上はいずれも語彙の実態を知る上で重要な観点であるが、なおかつ、それでは不十分であることは、いままでたびたび触れたことである<sup>11)</sup>。これらの観点からの比較調査では隔靴搔痒の感を免れず、これらの比較によっては、単に、互いの程度の差が指摘できるに過ぎないことが多い。たとい、その違いが指摘できても、その違いの意味するところ、つまり、それぞれの割合の数値の違いが何を意味しているかがなかなか説明がつかない。それぞれが確かに語彙の構造を示すものとしては一般的意味を持ってはいても、その一般的特性以上の固有の意味がなかなか見出しにくいのである。その点を一步進めるのがいわゆる意味構造分析である。これについてもすでに諸処で述べたが、ただ、この意味構造分析なる用語が明瞭性に欠けるところがあるとの指摘があった<sup>12)</sup>ので、さらに説明を試み、その実際を示した<sup>1)</sup>。要をいえば、語彙の構造が意味的にどうなっているかを明らかにし、その構造の違いから、比較対照されている

個々の語彙の特性を知ろうとする方法である。これによって、上記のいくつかの観点からは明らかにしえなかった語彙の諸特性を知ることができたのである<sup>13)</sup>。個別語彙間の意味構造の違いを比較してそれによってそれらの間の差異を知ろうとするのである。

ただ、意味を数量化するということは極めて困難なことである。そのために、『分類語彙表』(国立国語研究所 昭和38年)を用いる。もちろん、この『分類語彙表』は現代日本語を対象としたもので、その使用にはさまざまな工夫がいるが、これを規準とすることにより、個々の語に意味コードを付けることができる。そのコードの付け方にも種々の工夫がいるが<sup>1)</sup>、これを用いることにより、日本語以外の言語にも同様の意味コードを付けることができるはずである。現在、インドネシア語に対し、同様の試みがなされている<sup>14)</sup>。

こうして、コード化された語の構成比を比較することによって、統計的な検定法なども用いつつ、本稿でいう比較語彙論的研究を進めようと考えている。

#### 4. ま と め

本稿の眼目は、多言語間の語彙の共時的比較研究、及び一言語の通時的比較研究の可能性の追究である。その対象の選定方法と、その対象の比較によって明らかになるであろうこと、及び、その比較方法を示して、それを提案することにあつた。そして、その前提として、「比較」という用語について、狭く「比較言語学」的用法にとどめず、広く一般的に「くらべる」という意味で使用することとした。

語彙研究には、その前提・準備として大が

かりな語彙調査を必要とする場合があり、個人の力では不可能な場合もある。ただ、見方を変えることにより、すでにいくらかでも、その対象になる語彙は用意されているともいえる。方法として提案した意味構造分析のためにも、実は、もう一つ、個々の語に意味コードを付けるという至極厄介なことがあるが、工夫によって、その容易化を図ることができる。意味単位<sup>11)</sup>の導入である。

電算機が活躍するのも、まさに、語彙研究においてである。このことを考えると、この方面の研究は緒についたばかりとはいえ、前途は洋々たるものがある。単に言語の研究にとどまらず、その言語のもつ文化やその育まれた環境にまで思いをはせて考えるべき時期に逢着し、この方法は大いにその真面目を発揮することと思う。

## 注

- 1) これを一部実演してみたのが、拙稿「源氏物語と絵巻詞書の語彙——比較語彙論的考察試案——」(『日本語論究4 言語の変容』1995 和泉書院)である。但し、扱う対象は同系も同系、同じ日本語で、しかもほぼ同じ圏内のことばであったが、本稿での方法は他言語間にも通用するものであると考える。
- 2) 拙稿「訓読法華経と仮名書き法華経と——法華経和訳の経緯を概観し、語彙史の方法を提案し、仮名書き本としての倣成本仮名書き法華経を為字訓よりみる——」(高度化推進特別経費/大学院重点化特別経費による研究科共同研究報告書『開発

における文化2』平成6年3月)。

- 3) 林四郎氏「語彙調査と基本語彙」(国立国語研究所報告48 1971)。
- 4) 大野晋氏「平安時代和文脈系文学の基本語彙に関する二三の問題」(『国語学』87 1971)に語根の数として述べられたものではないが、1300余の数値が、基本語彙の数値として意味がありそうに思われる旨の記述がある。
- 5) 平山輝男氏『全国方言基礎語彙の研究序説』(昭和54)には「全国方言基礎語彙調査項目」として、18の分野に分けて2413語が掲げられている。
- 6) 服部四郎氏『日本語の系統』(昭和34)では215語の「基礎語彙」が取り上げられている。
- 7) 土居光知氏「基礎日本語」『国語文化講座』(昭和16)。
- 8) 『簡約日本語の創成と教材開発に関する研究』(国立国語研究所 日本語教育センター第二研究室分室 1994)。
- 9) 「個別語彙」とは個々の言語作品あるいは個々の言語資料の語彙をいう。
- 10) 例えば、名詞における性の違いの有無、複数語尾の有無とか、文構造の違いなどから、その言語集団の思考方法とか、その環境などについて云々することは、割合によくあることであるが、あまり意味の有ることではない場合が多い。
- 11) 拙稿「語彙論的語の単位試験——意味単位と分類単位と——」『日本語論究2 古典日本語と辞書』1992など。
- 12) 平成4年・平成5年における国語学界の展望 小野正弘氏「語彙(史的研究)」『国語学』177号 1994。
- 13) 阪倉篤義氏「万葉語彙の構造——その一、名詞語彙について——」『万葉』34号所収 昭和35.1。
- 14) 名古屋大学大学院文学研究科のジョジョック・スバルジョ氏はこの試みをしている。

## [SUMMARY]

A Proposal for the Comparative Study of Vocabulary

We will release the term "comparison" from the occupancy of the comparative linguistics

## 比較語彙論の構想

which makes it between the languages in the same systems.

We will use the term “comparative study of vocabulary”, when we compare the vocabulary among multiple languages.

We propose the way of selecting the vocabulary concerned. At the same time the method of comparison is proposed, too.

It is insisted that meaning should become in the center of the comparison.